全体会議（分科会報告）

第一分科会〈現代と教学〉

「立正安国」が目指すものは何か

座　　長　原一彰
問題提起　小瀬修達
助　言　者　伊藤立教
記　　録　松森孝雄　藤﨑善隆
運　　営　武藤晃俊　西口玄修　有本智心　丸山賀子　早坂鳳城

本年度の中央教化研究会議に於いては、これまで信じられていた「政教分離」原則に対する疑義を提示し、新たな「政教分離」観構築の下における仏教のあり方を提示された中央大学保坂教授、戦後の本宗を含めた諸教団による「立正安国」運動を概観して、『立正安国論』奏進七五〇年に向けてより実効性のある運動を求められた東洋大学西山教授のお二方の基調講演を受け、これまでの反省と新たなる認識の下に、「立正安国」が目指すものは何か、と題して議論を行った。

小瀬修達師の問題提起により、現代の諸々の状況を捉えるに当たって、宗祖が『立正安国論』を執筆せられたお立

場にならい、「現代における国家諫暁を考える」という立場から、『現代の立正安国論』奏進を考えるという手順で議論を行うこととした。提示したテーマは極めて大きなものであり、議論が多岐にわたり雑多なものとなる恐れがあったため、より具体的な形で議論を進めながら核心に迫っていこうと考えたためである。一部には、そもそも『立正安国論』や「教学」に「現代の」と冠すること自体に問題があるとの指摘もあり、こうした運営側の意図が伝えきれなかったという問題もあって、議論に停滞が生じることもあったが、参加者それぞれが主体的に『立正安国論』に向き合い、様々な立場から意見が出された。

一、基調講演を踏まえて

一般的な「政教分離観」を改め、仏教文明としての政治に対するアプローチの可能性を保坂教授が示されたことに対し、その重要性を再認識した。また、西山教授がこれまでの慶讃事業に対して「アリバイづくり」と批判されたことについて、強く反省させられるという意見が相次いだ。更に「一天四海皆帰妙法」の解釈に関し、新宗教についても毛嫌いするばかりではなく、それに対する対応を真剣に検討するべきであるとの意見が出された。

二、諫暁の是非

全体的に「諫暁を行うべき」との意見については多数の参加者が同意するものではあったが、それに対して「積極的」にということになると、少数に留まるものとなった。

賛同者の意見としては、現代社会に於いて対外的なアピールの重要性を挙げる意見、また一般的に名前の通用する「立正安国」を掲げることが効果的であるとの指摘があった。

一方、慎重な立場の意見としては、そもそも教団・教師の研鑽が不十分な状態で対外的に諫暁することの危うさを

指摘するもの、また教団の結束力が弱く、共通認識が持たれない中では危険だという意見が出された。

三、『現代の立正安国論』考

これらを踏まえ、仮に宗祖の諫暁の精神にならい、『現代の立正安国論』を以てそれを実行するとしたらどのようにすべきかを議論した。手法としては『立正安国論』に従い、現代の状況を「災難」、「原因」、「対処」「対告」、「国政」の順に、宗祖御在世の時代と現代について照らし合わせて考えるものとした。

①「災難」について

その範囲に対し、今日の異常気象・食糧危機・疫病・戦争などを踏まえて、世界的な視野で捉えていくべきとする意見と、国内的なものに留め、世界への立正安国実現に向けたプロセスとして、まず日本国内に於いて法華立国を目指すべきとの意見が出された。また、内面的・心理的なものに起因する凶悪犯罪や自殺なども、現代に於いては「災難」と捉えるべきだとの声があった。また、『現代の立正安国論』における「災難」として、既に科学的にメカニズムの説明がなされている自然災害を入れることに対し異議も出され、むしろその対処に大きな重要性があるとの意見も出た。

②「原因」について

モラルハザード等、現代社会における倫理崩壊が挙げられた。また、基調講演を踏まえて「一神教」的な考え方に問題を感じるという意見も出された。

③「対処」について

「共生」をキーワードとしたアプローチをできないか、また世間と同じ対応ではなく、『立正安国』を掲げる本宗独自の対応をとることで、その行動を埋没させない努力が必要であるとの意見が出た。新宗教のＣＭ活用術な

どのＰＲ戦略効果について宗門も考えるべきであること、また、行脚・修法は注目度・独自性も高く、こうした方向からの対処も可能ではないかとの意見があった。

④「対告」「国政」について

執権政治の行われていた宗祖の時代に対し、国民主権の現代に於いては、対告を政治的なトップに留めるのではなく、広く一般社会に広めなければならないとの意見と、政治家・中央省庁上層部の知的レベルの高さに期待し、一部に対してより深い内容でのアプローチの可能性を指摘する意見があった。更に世界に視野を向け、世界（市民・国連）には通仏教的、国内には法華経、個人にはお題目をと、重層的なアプローチの対象を挙げる意見もあった。また世界に向けた立正安国実現のためには、まずその基盤となるプロセスとして、国内への対処が重要であるとの指摘が出された。

四、おわりに

はじめに述べたとおり本分科会は、宗祖の諫暁の精神にならい、現代の諸問題に対処するに当たり「我々は何をできるか、すべきか」を考えるものであり、その思考の手がかりを『立正安国論』に求めたものである。『立正安国論』を各々が主体的に捉え、目の前の問題に宗祖にならって対処せんとすることは、我々の責務であると考える。

（藤﨑善隆）

第二分科会〈教団・教化〉

日常生活の中で「立正安国」をどう活かすか

分散会座長　野村佳正　馬島浄圭
問題提起　松田英秀　伊藤美妙
助言者　原顕彰　影山教俊
記録　中村龍央　馬渡竜彦
運営　宇都宮恵禎　石川修道　松本真美　岩田親静　高橋純子　遠藤了暉　岩本泰寛　成田東吾　鈴木大道
野村環右　山田孝行

第二分科会は参加者五十一名を数える大所帯の分科会となった。そこで、基調講演を受けての座長説明、問題提起を一室で共通に行い、その後は半数ずつに分散して討議を行う方式を採用した。参加者の発言の機会を増やし、活発な議論を繰り広げることをねらってであるが、それぞれの分散会で全く違う方向に話題が展開してしまう不安もあった。結果的にはそれも杞憂におわり、概ね両分散会で同様の内容の討議を進めることが出来た。

一、問題提起の意図

「大聖人の御心を学ぶのみならず、その御心を如何に現代に活かすか」となると「国家と宗教との関係」や「国家諫暁」など、「大上段に構えた議論になりがちですけれども」、「生活に密着した観点から、『立正安国』と

いうことについて考えてみることも必要なのではないでしょうか」。「立正安国を実現する為に、まず立正安『身』、立正安『家』を実現するにはどうしたら良いかということについて、考えてみたいと思います」。

「　」内は問題提起文の抜粋

このように参加者が住職、一教師として直面している日常生活における苦を出発点として問題提起することにより教団単位の話、抽象的な議論に偏ることなく―その重要性は当然であるが―、具体的な諸活動の報告、問題点の分析、発展的な展開が得られれば、と考えた。そこで提起原稿に具体的に現代版の天変地夭を列挙し、討議を開始することとした。

参加者からは立正安国を日常生活の場で論じることに議論の矮小化、発展性の無さを危惧する意見も提出されたが、政教分離を視点とする第一分科会の討論、宗門運動との関係を論じる第三分科会の議論と視点を変えて一般世間の目線で社会を見、また僧侶が如何に見られているかを意識しながら話し合おうとのことで理解を得た。

二、基調講演との連続性

基調講演Ⅰで提示された文明論、壮大な文明モデル、宗教性の欠如による日本社会の不安定を下支えする宗教家の役割等の俯瞰的な話題や、基調講演Ⅱで提示された「本化四菩薩プロジェクト」というダイナミックな話題、また「アリバイづくり」をするなとの諫言と分科会テーマの連絡は充分にとれたのだろうか。

基調講演Ⅱとの連絡については一先ず措くとしても、基調講演Ⅰとは抽象と具体、国家的視点と日常生活の場という対称関係をなしているのだから、議論の端緒では丁寧に基調講演にふれる必要があったのかもしれない。後述するが、参加者の発言に基調講演に言及するものがあまり見られず、些か残念であった。

三、分科会討議

話題を「日常の場」へと、限定ならぬ拡大したために、なかなか焦点が絞りきれず、個々の活動に関して対立点が見いだされたり、逆に応援や賛意が得られたりということもなく、もどかしい面もあったが、二日間四時間半の時間があっと言う間に過ぎ、充実した議論であったのではないだろうか。

さて、その内容だが、第一に日常の苦の洗い出し、第二にその克服の為の諸活動、第三に活動の成果や課題という三点にまとめることが出来よう。

①日常の苦

・大地震の被災者として、同じ苦しみを共有する者として思いやりの心が生まれた

・嫌仏の風潮

寺と日常生活の精神的距離感、檀信徒向けの組織ゆえに一般の人が集まらない

寺は相談の場でない、住職の顔を知らない、信仰の断絶、寺との付き合いは負の遺産

叙情的な風景の一部としての寺

・生活環境の悪化

衣食住の乱れ、子育て環境の悪化、時間的・精神的ゆとりの無さ、家族の団欒なし

競争の激化、情報過多、過疎による家の崩壊、独居老人の増加、過剰な物質

・倫理観の不在

隣人、知人の自死、自死の増加、コミュニケーション不足

②苦の克服の為の諸活動

・自分自身を高める

一家庭人として手本となる、我が身の日常を問いただす、カウンセリング技術の習得
社会問題に関心を持ち生き様を見せる、自行としてのボランティア活動

・檀信徒との信頼関係の構築
ネット・メールの活用、パンフレット類、法事の後の挨拶状、檀信徒の善行を賞賛
一日僧侶体験の企画、仏前結婚式の推進、易しいスローガンの作成、信行会の活用
よい聞き手としての役割、檀信徒への同悲と同喜

・地域社会での活動の充実
法服でなるべく日常生活や交際をする（病気見舞い等）、仏教情報センター電話相談協力
檀家同士のネットワーク作り、地域活動に積極的に参加、娯楽やレクレーションの企画

③活動の成果や課題

・宗門として地域活動へ参加する大きな方向性を示して欲しい

・メディアの利用、携帯ホームページ作成の必要性

・檀信徒の家庭内へ入り込む、檀信徒向けの易しい言葉が必要

・法服を着ている時だけが、布教の時間ではない

①から③まで参加者の発言から抜き出したが、いずれもほとんどの教師が意識していることであろう。一から多を敷衍することは好ましいことではないが、記録者も同様に①にあえぎ、②の活動の幾分かを実践し、③の思い懐いているので、以下に多少の私見を許して頂きたい。

参加者の発言に「たとえ難解であっても祖師の言葉を大事に研鑽し、それを根拠とした易しい言葉や活動でなければならない」という趣旨のものがあったが、この意見が新鮮に聞こえた参加者は多かったようである。教学の「現代

版」、「平易な言葉」、「マニュアル」を求める声が多数を占める中で、研鑽を続けている教学をもって現代社会の問題に対応することが可能と考え、具体的な方策を講じ、檀信徒教化へ邁進することができるとの意である。正論であり、弛まぬ研鑽を自らに課す我々にとっては当然のことであるが、多くの教師は普遍的、公理的な教学を持ちながらも目まぐるしく変化する娑婆社会にそれを応用することができず、もがいている。

最後にこれからの我々の課題について論じたい。この活動は仏国土顕現のために必要であるから教師全体に広めよう、という強い主張もなかったと思われた。教師個人の力量、範囲での活動が多く、散発的であり、自信を持って他の教師を巻き込み、大きなうねりにつなげようという意見が出てもよかったのではないか。むしろ自身の活動がどこに位置づけられるのか、本当にこれでよいのか、というかすかな不安さえ感じられた。教学と娑婆世界をつなぐ中間項としての教化学を早急に樹立する必要がどうしてもある。

（馬渡竜彦）

第三分科会〈現代社会〉

現代社会を具体的にどう教化して行くか

―布教の実践、教師としての社会参加、現代社会へのアプローチ

座　　長　黒木源章
分散会座長　梅森寛誠　小林貫誠　川名堪忍
問題提起　川名堪忍　三好和美
助　言　者　石原顕正
記　　録　三好和美　灘上智生　坂輪宣政
運　　営　石川浩徳　望月哲也　伊藤如顕　新間智照　秋永智徳　木村勝行　牟田口義隆　大西英充　吉村是修

第三分科会の今年度のテーマは「現代社会を具体的にどう教化して行くか」であり、副題は「布教の実践、教師としての社会参加、現代社会へのアプローチ」とした。

問題提起の内容および具体的な議論の進め方については事前にプロジェクト内で協議し、問題提起の概要は当日の会議資料の通り、実動に入った宗門運動の実践課題の中から、「但行礼拝の実践」と「いのちの活動」を取り上げ、これらに沿った話し合いの中から、小松総長が言明された「平成の立正安国メッセージ」に活かせるような具体的な提言を見出したいことを要望した。

当日の問題提起の場では、昨年、一昨年の当分科会の取り組みについて報告し、今年度のテーマがその延長線上に

あることを説明した。また参加者が多数であるため、三分散会に分けて議論を進めることを確認した。

一日目のテーマとしては「生命尊重社会とはどんな社会なのか、またその実現のために何が必要と思うか」を設定し、一グループ二十人前後の三分散会に於いて、まず参加者に全員に一通り意見を述べてもらった。

生命尊重社会のイメージについては、安心、安全、平等といった考え方が多かったのは当然であるが、少数意見の中には「仏子として生まれたことを自覚すること」「いのちについて語るとき、中絶問題も取り上げるべきだ」といったものがあった。生命尊重社会の具体的イメージよりも、問題提起で述べた「生命尊重社会の実現を目標として掲げることは、現代が生命尊重社会ではないということ」の意見に同調したものとして、宗教教育の欠落、生きがいのない社会、家族（寺族も含め）のなかで生命尊重の意識が低い、等々の発言があったが、現実に生命尊重社会を阻んでいる諸状況へのつっこんだ意見は余り聞けなかった。

生命尊重社会実現のために必要なことについては、日常の参加者の活動報告的な発言が多く、寺から出ての社会参加が重要だとする意見は多く聞かれたものの、全体的には、寺や宗門といった枠組みを超えた発想に立つ発言はなかなかみられなかった。

二日目は、「生命尊重社会とはなっていないという現状認識に立った上での具体的な提言」「そのために但行礼拝の実践がどのように活かせるのか」の二点にテーマを絞り、議論を進めた。

三分散会ともフリートークにより意見を出し合い、各会ごとに具体的な提言をまとめたいと考えていたが、第三分科会の提言というところまでまとめあげるには至らなかった。人数や時間などの制約の中、運営の難しさを痛感する中で、ここでは参加者の活動に基づいた意見をいくつか紹介する。

一日目の意見として、宗教教育の欠落の指摘があった。それを補うためには、寺子屋活動に代表される子どもへの働きかけや、様々な機会に宗教的情操を伝える地道な努力が不可欠である。また悩み相談を受けるネットワークづく

りの提案もあり、社会との関わりを大切に考えている共通認識は確認できた。

また「但行礼拝」については、その実践は教師が率先すべきものである、本当の敬いの心をあらわす姿としての「合掌」によって真に人と人とが尊敬し合うことができれば「生命尊重社会」が実現する、そのためにも唱題行・唱題行脚の重要性の再認識が必要であり、唱題修行により寺を中心にした共同体が形成される、といった意見があった。

現宗研サイドの運営方法の拙劣といった問題は棚上げにした上で、具体的な課題についての話し合いがいま一つ盛り上がりに欠けたことについて考えてみると、参加者各々の問題意識に温度差があることは、ある程度やむを得ないことであるとしても、参加者に「管区代表」としての意識が不足している事には苦言を呈しておきたい。

中央教研は、管区からの代表に出席を求め、参加経費は宗費によって賄われている会議である。にも係わらず、一日目のみ、もしくは、二日目午後の全体会議前に退席してしまう参加者が少なくない。

そうしたこともあって、今回はまとめの全体会議を従来以上に重要視した運営側の工夫が実らなかったのは残念であった。

参加者が、管区へ帰った後に、中央教研の報告をする場があればとも思われるし、また、逆に、中央教研に、各管区の取り組みを紹介する資料や活動状況等をアピールできる場を設けることも意識向上につながるかもしれない。

二日間にわたる参加者の真摯な意見交換に感謝申し上げ、運営側としての一層の努力を約束し報告とする。

（川名堪忍）